

臨床心理的地域援助の教育・訓練について

話題提供者：野島一彦
(九州大学)

九州大学の野島です。えっと、言わずがなですけども、今日のシンポジウムの4本柱の「心理アセスメント」、「心理療法」、「臨床心理的地域援助」、そして「研究」というのは、臨床心理士の4大業務に対応しております。そういう意味では、どこの大学院でも心理臨床家の養成ではこの4つに取り組んでおられるわけですが、本日は便宜的に各大学がその中のどこかに焦点を当ててお話をしていくという枠組みになっているわけですね。それで、これから、九州大学における、3番目の柱の「臨床心理的地域援助」というところに焦点を当ててお話をしたいと思います。レジュメをお配りしていますので、これをもとに進めたいと思います。

まず、〈臨床心理的地域援助とは〉ということについて述べます。「臨床心理的地域援助」という言葉は飛び交っておりますが、その意味については色々といまいちすっきりしないところもありますので、とりあえず杉本好行さんが、「伝統的な心理療法」と対比しながらの「臨床心理的地域援助」、つまり「コミュニティ・アプローチ」をまとめております。これによると、対象が、前者は個人とか家族とかを中心とするのに対しまして、後者は学校の教師や職場の上司など、地域住民ということになります。それからその行われる場所が、前者は主に面接室、後者は学校や職場、地域の必要な場所ということになります。前者のことを俗に密室モデルという言い方をします。また時間が、前者は大体固定的に週に1回1時間程度ということになるのですが、後者は必ずしもそうではなくて適宜(柔軟的)ということになります。それから焦点の当て方が、前者は主に個人の精神内界、あるいは過去ということになりますが、後者は環境もしくは個人とその環境の関係性ということになります。要は個人内界に焦点を当てるのは前者ですけど、後者は現実のその人と他者とのインタラクション、あるいはその人との関係・関係性ということになります。それから、方法としては、前者はカウンセリング、心理療法なんですが、後者は危機介入、コンサルテーション、ケア・ネットワークづくりということになります。目標は、前者はカウンセラーとの関わりによる成長を目指すのに対して、後者は環境調整による成長、キーパーソンの成長、地域住民の理解の促進ということになります。以上から、いわゆる「伝統的な心理療法」とは違っているということはある程度ご理解いただけたかと思います。

それでいよいよ本題なんですけれども、〈九州大学(大学院)における臨床心理的地域援助の教育・訓練の実践〉について述べます。九州大学大学院におけるこのコミュニティ・アプローチの現状はどうなっているのかについて、実はこのシンポジウムの準備をするにあたって、ちょっと考えてみました。そうすると、まずフォーマルにカリキュラムに出ておまして、そこに出席すると単位になるというものは大きく2種類あります。ちなみに、うちの大学院の心理臨床学コースは専任教員が10名と、院生がMが1学年20数名、Dが1学年10数名、全体で約80名おります。それで、フォーマルに、単位になる科目は、「臨床コミュニティ心理学」というのをA教員が開講しておまして、学校を1つのコミュニティとしてとらえ、そこで見られる問題行動、不登校、いじめ、校内暴力等を扱っています。これは「認知的学習」です。それから関連したという意味では、学外実習を病院実習(「臨床心理実習Ⅰ」と非医療の施設実習(「臨床心理実習Ⅱ」と分けておりますが、院生たちが行っているところは、病院、児童相談所、精神保健福祉センター、教育センター、発達教育センター、養護施設等で、そういうところでコミュニティ・アプローチに触れております。これは「見学および参加的学習」です。

それからインフォーマルなため、カリキュラムには載っておりませんが、単位になるわけではないのですが、多くの院生たちが自発的に取り組んでいるコミュニティ・アプローチに関連するものはいくつかあります。①A教員が大学内に月に数日、不登校の子どものためのフリー・スペースを設定して、地域の不登校の子どもたち、

引きこもりの子どもたちがやって来て、漫画を読んだりパソコンをやったりしますが、そこに院生と学部生とがボランティアで関わっています。②B 教官が地域の発達障害の子ども・親を週に 1 日大学に集めまして援助プログラムを展開しています。それに院生・学部生が関わって、療育的なことをやったり、親御さんの面接をやったり、環境調整をしたりということをしています。③A 教官が某中学校にスクールカウンセラーとして行っておりまして、そこに夕方 1 時間、フリースペースを設置しております。不登校の生徒たちがその時間だったらやって来れるわけです。そこに院生が関わっております。④発達相談部門と連携している学外の障害児・者関係のための研修施設がございまして、そこに院生が毎週金曜日定期的に出掛けて行って、サポートをしております。⑤地域の電話相談の相談員の教育研修ということで、電話相談のボランティアの養成訓練に院生が関わっております。⑥小学校で学級コミュニティをレベル・アップさせるためのエンカウンター・グループを院生が週に 1 回出掛けて行って実施するとか、あるいは夏休みに集中的に 3 日間実施することをしてしています。⑦エイズ・カウンセリングは単なる密室モデルのカウンセリングにとどまらず、医師との関係、対象者のパートナーとの関係、あるいは行政・医療との関係というところに関わることになりませんが、院生がエイズ・カウンセラーになるための訓練を受けております。⑧学校巡回カウンセラーということで、小学校には年に 1 回、中学校には 2 回、心理士 2 名と元教職経験者の 3 人でチームを作りまして、学校を巡回しまして、学校の先生や保護者や子どもの話を聞いてというサポートをしておりますが、心理士は院生です。⑨最近公立学校のスクールカウンセラーが足りなくなってきたので、臨床心理士の資格がなくても準カウンセラーとして院生が 1 学年 10 名くらい行っております。⑩メンタル・フレンドということで、不登校、引きこもりの子どもたちにコミットする活動がありますが、それにやはり院生が行っています。⑪現在準備中なんですけど、在日外国人親子の心理支援プログラムを展開しようとしております。特に福岡はいろんな国から人が来ており、子どもたちが地域の小学校・中学校に行くのですが、そこで子どもが不適應になったり、それを見た親御さんが不安定になったりします。それで、親子のメンタルケアをやるとういうわけです。ちなみに心理臨床学コースの院生の 1 割が留学生になっております。これまで、中国、韓国、イラン、インド、イタリアなどから来ております。それでこのプログラムの中では留学生の母国語が使えるような形でやれたらということを考えております。以上は「体験的学習」です。

関連した研究会ということでは、C 教官による月に 1 回の①学校巡回カウンセラー研究会、②スクールカウンセラー研究会（1 年目の研究会、2 年目の研究会と 2 種類あります。）③メンタルフレンドの学会があり、事例検討会を行っております。これらの研究会の参加者のための E メールによる随時のアドバイスが行われています。誰かが困ったら、C 教官のところにメールを送ります。それに対して C 教官はコメントをして、関係者全員にそのやりとりのメールを送ります。かなり頻繁にやりとりをしています。これは「体験の検討」です。以上が九大で行われているコミュニティ・アプローチに関わる教育訓練、学習の機会となっております。

次に「臨床心理的地域援助の教育・訓練の進め方」について述べます。これは、①「認知的学習」、②「見学および参加的学習」、③「体験的学習」、④「体験の検討」ということになります。心理療法ないしアセスメントの場合とほぼ同じではないかと思えます。

それから最後に、「臨床心理的地域援助の教育・訓練の課題」について述べます。まずは、「臨床心理的地域援助」についての心理臨床関係者の共通理解が出来ていないということです。うちの 10 名の教官の中でも、いまいちですし、それに臨床心理学会でもいまいちですし、いろんなところでいまいちという感じです。しかし、おそらく 21 世紀の心理臨床はここが 1 つの鍵だと思います。次に 4 つの学習スタイルに関してですが、「認知的学習」では、A 教官が学校コミュニティを扱っておりますが、職場コミュニティとか地域コミュニティとかも含めた包括的な介入方法をやはりレクチャーできるようにならなければならないと思います。また「見学および参加的学習」では、出来るだけ多様なコミュニティ・アプローチの場を確保することが大事だと思います。それから現在、病院実習は集中的に夏休みに 2 週間、施設実習は分散して週に 1 回のペースで行っておりますが、この集中

と分散の組み合わせは今のままでいいのか、あるいは病院も施設も集中と分散の両方体験させた方がいいのか、といった問題があります。それから「体験的学習」では、さらなる体験の場の確保が課題です。それと、九大では単位にはならないインフォーマルな場がたくさんあって、多くの院生が自発的に参加しているのですが、院生の自発性に任せてしまっているのか、あるいは必修化して多少全員にやらせた方がいいのか、この辺も課題になります。「体験の検討」をめぐっては、「臨床心理的地域援助」の体験の検討ということは、教官があまりやってくれてないので、多くの教官の協力も必要かなと思います。しかし他方では、教官に全部をやることを求めるよりは、コミュニティ・アプローチを体験した先輩たちが多く巣立っていますから、先輩たちを活用していくといいかなとも考えています。以上です。